

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月20日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320058

研究課題名（和文） 大西洋交易の変容とアメリカン・ルネッサンス

研究課題名（英文） The Development of Trans-Atlantic Trades
and Its Impact on American Renaissance Writers

研究代表者

竹内 勝徳（TAKEUCHI KATSUNORI）

鹿児島大学法文学部・教授

研究者番号：40253918

研究成果の概要（和文）：

本研究は、1830－1860年の大西洋を中心とした交易——貿易、交通、移民、文化交流——の変容と、そこに接続するアメリカ国内の経済状況を調査すると共に、アメリカン・ルネッサンスの作家たち、即ち、エマソン、ソロー、ホーソーン、メルヴィル、ポー、ホイットマンらが、いかなる想像力をもってその状況を眺め、作品の中にどう表現したかを明らかにした。考察対象としての地域は、北米と欧州の大西洋周辺部、カリブ海、西アフリカ等にも及んだ。

研究成果の概要（英文）：

This research project focuses on how the development of antebellum trans-Atlantic trades and the resulting socio-political phenomena gave impact on literary imaginations of American Renaissance writers——Emerson, Thoreau, Hawthorne, Melville, Poe, Whitman, and so on, and how they reflected it in their literary works. The areas we studied range from parts of North America and Europe surrounding the Atlantic, to the Caribbean and West Africa.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2011年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2012年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
年度			
総計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学、アメリカン・ルネッサンス、アメリカ経済

1. 研究開始当初の背景

国家間の力関係の中でアメリカン・ルネッサンスを捉える試み自体は決して新しいものではなかった。マイケル・ポール・ロウジンは早くも1978年の『反乱の血筋』でメル

ヴィルのフランス革命（1848年）に対する意識を考察しているし、ラリー・レノルズの『ヨーロッパ革命とアメリカ文学ルネッサンス』（1988）は同じくフランス革命やコシュートの反乱が誘引したアメリカ国内の不安

と作家たちの反応を取り上げていた。また、ロバート・ワイズバックの『大西洋往復』(1988)は、エマソンとカーライル、メルヴィルとディケンズなどの影響関係を取り上げ、イギリス文学の支配力に抗するアメリカ作家の活動を追っている。

一方、最新のトランスアトランティック・スタディーズ(Transatlantic Studies)はポール・ジャイルズが中心となって推し進めた研究分野であり、大西洋を越えた共通の文脈で英米作家を解釈することを標榜している。例えば、ジャイルズの『大西洋共和国』(2007)では、アメリカ独立革命が18-19世紀のイギリス作家に与えた思想的影響が、『大西洋を横断する反乱』(2001)では、ホーソンとトロロープがそれぞれの物語で相手の国を文化的他者として利用していることが詳細に述べられていた。同じくジャイルズの『ヴァーチャル・アメリカ』(2002)では、メルヴィル晩年のイギリス作家との交流について掘り下げられていた。

その他、トランスアトランティック・スタディーズとしては、ジョン・カーロス・ロウ、スーザン・マニング、ローラ・ステイブンスらの論文も含まれる。関連する研究として、グレッチェン・マーフィーの『想像の西半球』(2005)があるが、ここでは大西洋の交流とは逆に、アメリカがモンロー原則によって例外論(exceptionalism)に走り、ヨーロッパから切り離された形で独自の帝国主義を進展させるプロセス、そして、それに対する作家たちの反応が取り上げられていた。また、ティモシー・B・パウエルの『無慈悲な民主主義』(2000)では、19世紀前半の国家アイデンティティが、先住民、黒人奴隷、アイリッシュ移民などを包含することで多文化的に拡張していく状況と、それを封じ込めようとするナショナリズムの力学、そしてそうした政治的

状況を様々なレベルで反映させるホーソン、メルヴィル、ソローらのテキストの諸相が考察、分析されている。

この研究史において、指摘できる問題点は以下の通りであった。まず、(1) 国家間の比較研究で、ワイズバックとレノルズ以外にアメリカン・ルネッサンスを包括的に扱った研究がない。(2) アメリカン・ルネッサンス作家の経済に対する意識を扱った研究が少なく、大西洋経済との関連を扱った研究となると皆無である。(3) 上記のトランスアトランティック・スタディーズは、全て政治意識、国家意識を軸とした作家比較、作品比較であり、実際の市場や移民問題、国家間の経済問題に言及していない。このことはワイズバックの研究にも当てはまった。

唯一、本研究が直接的な先行研究とみなしたのが、マイケル・ギルモアの『アメリカン・ロマンティシズムと市場』(1985)であった。しかし、ギルモアの考察はアメリカ国内の市場に限られているし、その市場分析も8頁程度にすぎず、トランスアトランティックな研究が注目される現代の視点から見ると甚だ不十分であると言わざるを得ない。

2. 研究の目的

本研究が立脚したのは、イマニュエル・ウォーラーステインの大西洋経済に関する歴史観である。ウォーラーステインは、アメリカの独立(1776年)、フランス革命(1789年)、ハイチでの黒人政権の樹立(1790年)、アイルランド大蜂起(1798年)を「大西洋革命」と名付け、それまで「周辺国」であったアメリカがこの大西洋を軸とする相互連携的な国際関係を通して「中核国」へと成長していったとしている。即ち、アメリカの独立自体がコスモポリタンのであった。トマス・ペインやフランクリンの動きをみても、これは否定できない。

しかし、「中核国」としての足場を固めるアメリカは1812年の英米戦争以降になると、高関税によって繊維製品の輸入を制限する保護貿易政策を始め、国内経済の強化を図った。南部州でも、農産物の輸出は活発であったが、奴隷貿易が終結すると、「周辺」と化した黒人奴隷を国内流通させ始めた。これには、奴隷制農業によって疲弊しがちだった農地を、次々に開拓して拡張する必要性があったという事由にも依る。アメリカが領土拡大とナショナリズムに走ったのはこれ以降である。イギリスは依然として世界の産業の中心であったが、予想を超える貧富の差の拡大により、ヨーロッパから大量の移民が弾き出され、新興「中核国」アメリカがこれらの移民を新たな「周辺」として受け入れた。

大西洋を隔てて「中核国」が複製される中で、アダム・スミスが提唱したゆるやかな自由貿易と市場競争による国家群の共存共栄は幻想となり、アメリカは産業帝国化の要件を満たしていった。しかし、大西洋経済がこのように変容する中、アメリカの文学者たちは、母国の保護貿易傾向に逆行するかのようにヨーロッパを遊学し、ヨーロッパの文化を受容した。アメリカ独立時にみられたコスモポリタニズムが、大西洋経済変容の時代を上滑りするようにして、アンティベラムの文学者に受け継がれたかのようにであった。

本研究は、この歴史観に沿って、上記の研究史に欠如している分野を開拓すると共に、ギルモアが先鞭をつけた研究を大きく更新し、アメリカン・ルネッサンス作家と大西洋交易の関係について、経済、貿易、交通、移民、文化交流を含めて、包括的、立体的に調査・研究を行った。具体的には、以下の目標を達成した。(1) 大西洋経済・交通・貿易に関する基礎的事象を明らかにすると共に、アメリカン・ルネッサンス作家の伝記や手紙、

日記に表れたそれらの事象を抽出する。(2) 移民や渡航者など大西洋の人の流れを検証する。(3) 資本主義思想に対する作家たちの立場を明らかにする。(4) 上記(1)から(3)を踏まえたうえで、作品に表れた大西洋交易イメージを分析する。(5) 上記(4)の議論を踏まえたうえで、作家たちのコスモポリタニズム的特質を明確にし、その思想が同時代のアメリカ・ナショナリズムとどのように対立し、どのように折り合いをつけたかを検討する。(6) Moodle、遠隔会議、映像配信等、最新のwebテクノロジーで研究成果を発表する(<http://mstudio.kuas.kagoshima-u.ac.jp/moodle>)。

3. 研究の方法

本研究では、上記の欄で示した(1)から(5)の目的を達成するための方法として、(A) 文献調査、(B) 実地調査、(C) テーマ研究、(D) コンテクスト研究、の4つのアプローチを取る。研究対象となるアメリカン・ルネッサンス作家は、エマソン、ソロー、ホーソーン、メルヴィル、ポー、ストーである。

4. 研究成果

2か月に1回の例会を開催して研究報告を行うと共に、毎年8月に夏季セミナーを開催し、関東や関西からゲスト講師を招へいして研究を深めた。招へいしたゲストは、西谷拓哉、飯野友幸、成田雅彦、高尾直知、阿部公彦、佐久間みかよ、中野学而、斎木郁乃、橋本安央各氏である。実地調査としては、シドニー大学、ロンドン大学、ハーヴァード大学、ローマ大学、コンコード公立図書館、マサチューセッツ歴史協会、ボストン文庫、ナンタケット捕鯨博物館等多岐にわたった。2011年10月にはトランスアトランティック研究の権威であるポール・ジャイルズ氏を日本に招へいし、福岡、京都、東京にて講演会を開催

すると共に、本研究について詳しいレビューを受けた。また、2012年にはピーボディ姉妹やマーガレット・フラー研究で現在世界最高の実績をあげているメーガン・マーシャル氏を日本に招き、国際シンポジウムや日本ナサニエル・ホーソーン協会の講演などを開催した。また、本研究についての詳しい指導・助言をもらった。

国際学会では国際メルヴィル学会（ローマ大学）、国内では日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム（名古屋大学）、日本英文学会全国大会シンポジウム（専修大学）などで成果報告を行った。本研究の集大成は2013年3月に発行した『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』（彩流社）である。本書には上述したジャイルズ氏の講演原稿「アメリカ文学を裏返す—環大西洋海景と全地球的想像空間」を収めた。高野泰志は、ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』を取りあげ、「食」とアイデンティティ、植民地主義の関わりから、頻出する食材の描き方や人肉食の場面を検討している。竹内はエマソンの『イギリス国民性』で述べられているアメリカ経済とイギリス経済の連動性に注目し、エマソンが思い描いた大西洋経済の理想と現実のずれを問うている。城戸光世は、マーガレット・フラーがヨーロッパ滞在中に送り続けた新聞記事、特に、イタリア革命の臨場感あふれる報告に焦点を当て、彼女の改革精神や共和国の理想を失ったアメリカへの批判を読み取っている。高橋勤は、南部の綿花生産と強く結びつく北部資本家の利権に注目し、南北によって奴隷制度が温存される経済構造とそれに反発するニューイングランドの道徳性の対立が、エマソンやソローの聖書的なアレゴリーの枠組みによって表現されているとしている。稲富百合子は、ホーソーンの各作品や彼のヨーロッパで

の経験、さらには同時代の文化的背景を調べ上げることで、『大理石の牧神』の登場人物であるミリアムに重ねられたユダヤ人のイメージ、そしてクレオパトラのイメージを読み取り、それらが用いられた根拠へと迫っている。大島由起子は、メルヴィルの長編詩『クラレル』の登場人物ネイサンに焦点を当て、その家系が、先住民からの土地収奪、西部への移住、さらには聖地への移住、ユダヤ教への改宗と、アメリカという国家の成立を遡るような移動パターンを示していることに注目し、メルヴィルが壮大な規模で交錯させた人種表象を解きほぐしている。井上間従文は、F・O・マシーセンとチャールズ・オルソンのメルヴィル読解を検討することで、アメリカン・ルネサンスの概念形成に潜む帝国主義的な主体化＝従属化のメカニズムを明らかにし、同時に、そこから逃走していく文学表現の可能性を探求している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

(1) 高橋 勤、「果てしなき宇宙-超絶主義思想と天文学」『英語英文学論叢』62号（九州大学英語英文学研究会）、査読無、2012年、1-18。

(2) 稲富百合子、「禁酒運動とホーソーン文学」『フォーラム』17号（日本ナサニエル・ホーソーン協会）、査読有、2012年、17-34。

(3) 井上間従文、「石たちの「共感域」—1960年代の清田政信と「オブジェ」たちの共同性」『Las Barcas』2号、査読無、2012年、39-51。

(4) 井上間従文、「物語の『根源』—諏訪敦彦の『2/Duo』と『H Story』」『ECCE 映像と批評』3号、査読有、2012年、90-103。

〔学会発表〕（計7件）

(1) 竹内勝徳、「独立戦争とメルヴィル」日本アメリカ文学会第51回全国大会シンポジウム「メルヴィルと戦争」、2012年10月14

日、名古屋大学東山キャンパス。

(2) 大島由起子、「メルヴィルとピーコット戦争」日本アメリカ文学会第 51 回全国大会シンポジウム「メルヴィルと戦争」、2012 年 10 月 14 日、名古屋大学東山キャンパス。

(3) 高橋 勤、「野性の文化論」比較文明学会九州支部大会、2012 年 7 月 28 日、香蘭女子短期大学。

(4) 竹内勝徳、「(脱)トラヴェル・ライティングとしての Typee」日本英文学会第 84 回全国大会シンポジウム「旅と移動のアメリカ文学」、2012 年 5 月 27 日、専修大学生田キャンパス。

(5) 城戸光世、「Notes in England and Italy——旅行記作家としての Sophia Peabody Hawthorne 再評価」日本ナサニエル・ホーソン協会第 31 回全国大会ワークショップ「ピーボディ姉妹とホーソン——ヨーロッパと中南米への視座」、2012 年 5 月 25 日、日本大学。

(6) 城戸光世、「“The Queen of Journalizers”-Sophia Peabody Hawthorne as an author in Notes in England and Italy」ワークショップ「Recontextualizing the Hawthornes: What European Experiences Taught Them in the Age of Transatlantic Cultural Exchanges」、2012 年 5 月 20 日、福岡大学。

(7) 高橋 勤、「殉教のレトリック——コンコード、プリマス、ハーパーズ・フェリー」九州アメリカ文学会第 58 回大会、2012 年 5 月 8 日、熊本大学。

〔図書〕(計 14 件)

(1) 竹内勝徳、「二つの国家と二つの『富』——エマソンの大西洋経済学」『環大西洋の想像力』(彩流社) 2013 年、89-108。

(2) 竹内勝徳、「革命を呼び込む移民たちの行方」『ロマンスの迷宮』(英宝社) 2013 年、5-23。

(3) 高橋 勤、「経済と道徳——綿花をめぐる物語」『環大西洋の想像力』(彩流社) 2013 年、221-239。

(4) 大島由起子、「『クラレル』のニュー・パレスチナと北米先住民」『環大西洋の想像力』(彩流社) 2013 年、285-302。

(5) 城戸光世、「共和国幻想——マーガレット・フラーのヨーロッパ報告」『環大西洋の想像

力』(彩流社) 2013 年、109-128。

(6) 城戸光世、「もう一つのファミリー・ロマンス——ハウスキーピングの物語として読む『七破風の家』」『ロマンスの迷宮』(英宝社) 2013 年、43-60。

(7) 高野泰志、「トランスアトランティック・アペタイト」『環大西洋の想像力』(彩流社) 2013 年、71-88。

(8) 稲富百合子、「『大理石の牧神』における人種問題——ミリアムを中心として」『環大西洋の想像力』(彩流社) 2013 年、265-284。

(9) 稲富百合子、「『ブライズデイル・ロマンス』における改革運動——〈共感〉の観点から」『ロマンスの迷宮』(英宝社) 2013 年、61-77。

(10) 井上間従文、「帝国の「ほつれた縁」、または、生政治の「孤島」たち」『環大西洋の想像力』(彩流社) 2013 年、321-345。

(11) 高橋 勤、『コンコード・エレミヤ・ソローの時代のレトリック』(金星堂) 2012 年、283。

(12) 高橋 勤、「『ウォールデン』における奴隷制表象——「より高い法則」をめぐる」『ソローとアメリカ精神』(金星堂) 2012 年、169-184。

(13) 大島由起子、「『水夫ビリー・バッド(秘話)』の終え方——薔薇と水夫によるビリー救済」『カウンター・ナラティブから読むアメリカ文学』(音羽書房鶴見書店) 2012 年、38-55。

(14) 城戸光世、「ロマンスの廃墟／廃墟のロマンス——ホーソンのイタリア旅行記にみるアメリカの未来図」『カウンターナラティブから読むアメリカ文学』(音羽書房鶴見書店) 2012 年、21-37。

〔その他〕

ホームページ等

<http://mstudio.kuas.kagoshima-u.ac.jp/moodle>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内勝徳 (TAKEUCHI KATSUNORI)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号:40253918

(2)研究分担者

高橋勤(TAKAHASHI TSUTOMU)
九州大学・言語文化研究院・教授
研究者番号:10216731

大島由起子(OSHIMA YUKIKO)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号:40168919

稲富百合子(INADOMI YURIKO)
福岡大学・言語教育研究センター・
外国語講師
研究者番号:50526514

高野泰志(TAKANO YASUSHI)
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号:50347192

城戸光世(KIDO MITSUYO)
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号:10351991

井上間従文(INOUE MAYUMO)
一橋大学・言語研究科・准教授
研究者番号:50511630